

Nightmare Christmas ～Holy night war～

リユ一ヤ

クリスマス。それを聞くとだれもが胸を躍らせてしまう最高の日のことである。

外に出れば目につく美しいモール、連なる万国旗、華やかなクリスマスツリー、町中に溢れ返る看板を担いだサンタクロースの大群。

子供にとってはこんな日にしか食べられないご馳走にありつくことのできる

Special Days。

恋人達にとっては白い雪の中でお互いの愛をさらに盛り上げる

Love ng Day z。

大切なあの人のため、またはあの子のためについ財布が緩んでしまう

見栄張り Days。

商店側にとっては、クリスマスフェアに囲ってケーキやお菓子、おもちゃの在庫品を一斉処理する

ウルトララッシュ。

ただこんな季節、イマイチ喜びにくい存在がいるという事を忘れてはならない。

十二月二十四日に現れる彼らにとってクリスマスとは、世界一多忙な日でしかない。

雪が一年中降りしきる国がある。そこがどこなのかいう事は絶対にできない。

なぜならば、ここには人に存在を認知されてはいけない者達が集まっているからだ。

十二月二十二日

その日も、雲で灰色に染まり濁った空からは小雪がちらついていた。モミの木が群生している雑木林を抜けた先に、一軒のログハウスが建っていた。煙突からは煙が絶え間なく上がり、窓からは明かりが漏れている。奇妙なのは、このログハウスに隣接された小さな小屋だ。この小屋の中には、なぜか数十頭のトナカイが収容されていた。トナカイ達はこれ以上寒くならないように身を寄せ合い、木箱の中に詰め込まれた干し草や木の実をがんばって頬張っていた。

それは置いとき、ログハウスに視線を戻そう。寒さ対策で厚めに作られた木製の扉を一枚抜けると、数人の男女がレトロチックな木製の椅子に腰かけテーブルを囲っていた。そして全員、テーブルの上にゴチャゴチャと乱雑に山積みされた大量のファイルに目を通して最中であつた。

この集団、よく観察してみると面白い共通点があることに気が付く。全員、多少のデザインに違いがあるものの赤い服を身に纏っている。その姿はまるで、季節的にサンタクロースをイメージさせてくれるような光景だつた。

しかし種明かしをするならば、それもそのはずである。今ここに集っている者達は、「全世界サンタクロース国際連盟会」に所属している、言わば正真正銘本物のサンタクロースの集まりなのだから。

彼等、彼女等は普段は普通の人間として生活しているが、クリスマスの一週間前になると必ず全員ここに集まり、自分の担当している国にばら撒くプレゼントについていろいろと話し合ったり準備したりしているのだ。そして今全員が颯めっ面で睨みあっているファイルが、それぞれが担当することとなっている国のプレゼントのリストと言う事になっている。世界中の子どもたちが相手となると、数も半端ではない。中にはリストを読むフリをしてこっそり眠っているサンタまでいる。

そんなこんなでクリスマスに向けての重要な話し合いとは思えないくらいゆったりとした空間の中、カタンと扉が開かれて誰かが入室してきた。入ってきたのはもちろんサンタクロースだつた。ただ周りのサンタクロースと比べ、このサンタクロースは子供のイメージを三次元に持ってきたくらい、サンタクロースらしいサンタクロースだつた。恰幅のいい体格に額の面積が広い白髪頭、そして某有名宇宙戦艦の艦長のような口の周りにたっぷり蓄えられた長い髯。まさに完璧だ。

何を隠そうこのサンタは、全世界サンタクロース国際連盟会の第41代目名誉会長である。会長は体にかぶった雪を払うと、ゆっくりとした動作で周りを見回した。

「ほっほっほ。皆揃っておるようじゃのう」

会長は出席確認を済ますと、杖をつきながら一番奥に用意されていた上座に腰をかけた。

「HAHAHAHA☆やっと来たかい爺さん！あんまり遅かったから俺様GO TO HOMEするところだつたZEI!!!」

イの一番に口を開いたやたらめったらにテンションの高い、浅黒肌のコメディアンみたいなドデカイサングラスをかけたサンタは、北アメリカ方面を担当しているサンタである。

「貴様、会長に向って口が過ぎるぞ。もっと礼儀や礼節をわきまえさない」

アメリカサンタに威圧ある声で注意したのは、すぐ正面に座っている西アジアを担当しているサンタだつた。紫がかつた黒い長髪を後ろで縛り、細いツリ目に眼鏡をかけた整った顔立ちをしている。風貌や発言から優等生的なイメージが受け取られる。

「アハハハハハ！アジア人頭ベリーベリー固いね～！もっとリラックスしたらどうですか～？」

突然隣りでけたたましく笑い出したのは、オーストリアを担当しているサンタだ。このサンタは連盟会の中でも珍しい

女性のサンタで、オマケに赤道付近の担当のせいなのか身につけているサンタ衣装の面積が若干薄く、足とか肩とかが露出している。

「あ、頭が固いとかそういうことではなくてですね、ボクはただもっと人としての礼儀をですね・・・」

西アジアサンタはやや目を反らしながら反発するが、目を背けてトマトみたいに赤くなった顔で何を言ったところで説得力に欠ける。オーストリアサンタはこの反応を見て面白がるために、毎年西アジアサンタを確信犯的にいじめているのであった。

「アハハハハハ！！アジア人とってもウブねえ！女の子見るだけで赤くなりま～す」

「失敬な！だからそういう訳では・・・」

「でもそんなところがとてもキューティクルで一す！！」

何かに耐えられなくなったオーストリアサンタが、いきなり西アジアサンタに思いっきり抱きついてきた。西アジアサンタの頭はそのまま自然とオーストリアサンタの豊満なバストに埋められる形となってしまった。放せと叫んでもがけばもがくほど、相手もムキになって強く抱きしめ返してくる。今の西アジアサンタには、もう知性のカケラさえも見当たらない。会長が仲裁に入るまで続けられる、言わば年中恒例の光景といったものと等しい。

「フウ・・・若い者は節操がなくていかな」

騒がしい二人のやり取りを遠目から眺めているのは、アフリカ方面担当のサンタだった。現役サンタの中では最高齢の現在42歳、黒い肌と堀の深い顔立ち、過去にどこかの戦争で負った古傷がかっこいいダンディズムなオジ様サンタだ。

しかしまあ、それに比べてこいつらは・・・と言いたげな表情でチラリと視線の方向を変えた気には、若い女性サンタが二人いた。

一人はヨーロッパを担当しているサンタで、白人らしい透き通るような白い肌に丸眼鏡とおさげが似合うかわいらしいサンタだ。只今彼女はファイルを広げて立たせ、すっかり居眠りをしている最中だった。本来はまじめなのだが、彼女は緊張感というものが少し欠如しているのは悩みの種だ。さっきだって会長が見えたというのにピクリとも反応を見せることなく寝息をたてていた。

もう一人は、南アメリカを担当しているサンタ。南米と言えば明るく陽気なイメージのある国なのだが、彼女はその真逆の性格をしているのが悩みだった。パーマ気味の黒髪に、まるで怨念でもこもっているかのような双眸、目の下にはメイクの様な濃いクマ出来ておりさっきから自分のファイルを呪いでも込めるかのように凝視している。自分以外のことにはほとんど興味が無く、驚くほどに無口は少女であった。この中では最年少のサンタで、現在19歳。

「ほっほっほ、全員元気があってよろしいのう。それでは早速、始めるとしようか」

会長の一言で、あれだけ騒いでいた連中が急に静かになった。眠り呆けていたサンタも目を覚まし、目をこすってようやく会議が始められた。

「ええ、今日の議題なんじゃが、その前にまず残念な知らせからじゃ」

「Why? 残念ってなんだよ爺さん。ワイフに逃げられたのKAI?」

「いや、今だにもって元気じゃ。話を戻すぞ。もうみんな知っていると思うが東アジアを担当していたサンタ、つまり、Mr寺井が先日サンタ業を引退なされた。」

会長の口から衝撃的な発言が飛んだ途端、部屋中の空気がわずかに重力を増して重くなった。

Mr寺井。本名寺井登米五郎。去年まではみんなと同じサンタクローズとして東アジアと担当していたサンタで、現役最年長の57歳だった。だが数か月前、病院で定期健康診断を受けた結果、自分の身体にガンが見つかった。早期発見が功を奏し、今年からは治療に専念したいという理由で会長に引退することを電報で送っていたのだ。

「Mr寺井か・・・。私も若いころは、随分と可愛がられたものだったな」

そう呟くのはアフリカサンタだった。この中では一番年が近かったせいで、昔はサンタとしての指導を受けたり、酒に付き合わされたりしたものだだった。

「ボクも残念でなりません・・・。ところで、寺井さんがいなくなった東アジアの穴は、誰が埋めるんですか？」

「そこなんじゃよな～。実はもうサンタ候補の目星は立っているのじゃが・・・ん～」

会長の雲行きが明らかに怪しくなってきた。その様子が一番早く察したのは、南アメリカサンタだった。

「・・・そいつに何か問題が？」

南アメリカサンタの間こえにくいほどに小声のツッコミに、会長はう～むと唸ってからうなずいた。

「その男、サンタクロスとしての実力は最高なんじゃが、性格が・・・その・・・ちょっと、のう」
「H A H A H A H A ☆この俺様よりも問題があるサンタなんてこの世にいるのかY O ! ?」

自分がサンタの中でも問題児であることを自覚していた北アメリカサンタを、南アメリカサンタが「ウザい・・・」と一言つぶやいてから呪力の込められた瞳で睨みつけた。北アメリカサンタは蛇に睨まれた蛙よろしく、スゴスゴと発言を止めて席に戻った。

「しかし彼以外、今のところ候補がないんじゃないわ。そこでこの件を、同じアジア人として君に頼みたいんじゃが、い
いかのう？」

そう言って会長が名指したのは、西アジアサンタだった。彼は指名を受けると、スッと立ち上がって頭を少しだけ下げた。

「わかりました。早急にその人物にコンタクトをとり、ここに連れてみます。」
「うん、頼んだよ。要らんと思うが、これがその人物の写真と、現在の住所じゃ」

会長はもそもそと髭の中...もとい、懐の中から写真と一枚の紙切れを取り出すと西アジアサンタに渡した。それを素早く受け取ると、西アジアサンタは早速ポケットにしまって席から立ち上がった。

そのままログハウスを出て行くと、隣接したトナカイ小屋の脇へ進んだ。ここに、雪が不自然に盛り上がっている奇妙なところがある。西アジアサンタはその雪の中に腕を突っ込むと、雪に埋もれていた布に手をかけ、一気に引っ張り上げた。

すると、雪の中から、一台のバイクが姿を現した。このバイクはY A M A H A の F 2 1 をモデルにした、サンタクロス専用のマシンである。

サンタクロースの乗り物と言え、トナカイの引くソリと相場が決まっているが、時代が進むにつれてその発想もサンタクロースの世界ではアナログ化しつつあった。

プレゼント配達のさらなる効率化、配達時間の短縮、トナカイの維持費削減が目的で開発されたのがこのマシンだ。このバイクは見た目こそ普通のバイクだが、サンタクロースの運送作業用にカスタムチェーンされており、一定のスピードに達するとソリと同じように空を飛ぶことができるようになっている。大陸全土の子どもたちを相手にする仕事のために、それぞれのサンタには自分専用のマシンが支給されている。このバイクもその一つだ。

早速キーを差し込み、エンジンをかけてこの冷え切ったエンジンに火を焚きつけた。エンジンが温まるまでの間に、一応先程渡された写真に目を落としておくことにした。

「・・・やっぱりコイツだったか」

西アジアサンタは、この見慣れてしまっている男の顔を見た途端、なんだかやる気が失せてきてしまった。
短めの黒髪。鋭い切れ目。全体的に漂うふてぶてしい風貌。

名前：緋村 剣助（ヒムラケンスケ）

年齢：22歳

住所：日本国 東京

.....

西アジアサンタは一瞬本気でこの依頼をやめようかと考えだした。

0XX年12月24日、クリスマス・イブ。

ここは日本の首都、東京。

ここもすでに町中がクリスマスイルミネーションで輝いて眩しいぐらいだった。歩いているだけで目につくサンタの衣装を纏ってチラシを配る男、くっついて歩く若い男女。大きなショッピングモールの中にはやたらと巨大なクリスマスツリーと煌びやかな星々の点灯。人が行き交う音に紛れて耳に届くクリスマスソングメドレー。

日本のクリスマス企画は、やはりアジアで一番だと彼は主張する。彼はこの大型デパートに飾られたツリーを見上げながら、そんな風に浸っていた。しかしただ単にこのクリスマスの雰囲気を楽しみに来たわけではない。彼はここに居るハズのある男を探しに来て言えるのだ。

とは言ってみたものの、その男の性格は彼が熟知しているから、今どこにいるのかなんて容易に考えられる。エスカレーターで三階まで昇ると、彼はそのまま看板の指示に従ってある販売コーナーを目指して歩いた。

目的地が近付くにつれて、大荷物を抱えた親子の姿が目立ちだしてきた。どうやら目的地は近い。

彼がそのまま迷いなく進んでいった先は、電化製品売場の最深部にある、ゲームコーナーである。

新作ゲームを目の前にしてはしゃいでいる子供たちにまぎれ、キョロキョロとあの男を探しだした。そんな中で彼は特に、新作ゲームの試プレコーナーから異様な気配を感じ取り、早速向かうこととした。

人だかりができて始めているゲームは、「新・頑駄無無双」というゲームだった。過去のガンダムシリーズに登場してきたガンダムが、ザクやらなんやらのMSを相手に、ドッカンドッカンプチのめしていく今話題になっているゲームなのは、彼も少し知っている。画面を見てみると、そこには丁度ヨシユアガンダムが次々に取り囲んでくるザクの大群を一瞬にして殴り倒しまっくいる映像が見えた。倒した数は、すでに351機を超えていた。

「ケッ！どんなに数で攻めてこようとなあ、雑魚は雑魚なんだよ！！」

必殺、アルティメット・フィンガアアアア！！！！」

男は本気になってガンダムのパイロットになったつもりなのか、周りの人だかりなど全く気にせずに自らの技を叫んだ。

「甘いぜ甘いぜ！本番はこれからだあああ！！」

「甘いのはお前だこのバカ」

目の前に現れたラスボスを前に、ガツンっ！重たい一撃が後頭部を襲い、男の視界が大きく崩れた。男はそのまま激痛に耐えかねてコントローラーをとり落とすと、その場に頭を抱えてうずくまった。

「痛ってえ……。何しやがんだコラァ！！」

男は涙を浮かべながらいきなり殴りつけてきた男を睨みつけた。が、その男と顔が合ったとたん、何かものすごく嫌そうな表情になってしまう。

この男、紫の長髪、ツリ目に眼鏡、そして見たことのある修道院の様な白い服。

オレはこの男を知っている。しかもよりによってこの時期に一番見たくない、大っ嫌いな奴だった。

この男、山吹 望（ヤマブキノゾム）という名の男は彼、緋村 剣助にとって同僚と呼べる間柄である。

ちなみに今緋村を殴ったのは、山吹が握っている1mちょっとの細長い布袋だった。

「山吹い……。テメェ何しに来やがったんだ？」

「ボクはお前なんかには用はない。会長がお前に用があるんだとさ」

お互い一言だけ発したのち、睨みあった蛇のようにしばらく動くことはなかった。

もう気付いてきた頃だろうがこの際種明かしをしよう。この山吹望と名乗る男、その正体はサンタクロース連盟に所属する本物のサンタクロースなのだ。冒頭の話の中に登場していた西アジア担当のサンタクロース、それが彼の正体である。で、今ショッピングセンターの外で彼と共に缶コーヒーを飲んでいるのが、同じサンタクロースの緋村剣助と言うことである。

ただ緋村の場合は正式なサンタクロースではなく、仮サンタクロースといった扱いにされている。

さっきも言ったが、この二人は同時期に時期サンタクロース候補としてスカウトされ、サンタクロースになるための修行を積んできた仲である。しかし山吹のみが先にサンタクロースになっているのは、この二人の間に存在する大きな違いがある。

それは、「性格」だ。

山吹の場合は第一印象通り、勤勉で努力家、修行時間外も修行につながる勉強や鍛錬をし続け、誰よりも早く立派なサンタクロースになることを目指していた。

それに引き換え、緋村はロクでも無いほどの怠けものであった。努力を重ねてきた山吹とは違い、緋村にはサンタとしての素質を元から強く備えており、どんな過酷な内容の修行でもそつなく、軽々とこなしていた。なのに本人はいまいちヤル気というものが足りず、隙あらばどこかへ消えてサボり放題。自分のことは自分のやりたい時に、やりたいだけやるという、何というか・・・山吹が物事に忠実な「犬」としたら、緋村は勝手気ままな「猫」みたいな男だった。修行時代では周りからは「野良ネコ」の愛称で煙たがられ、悪行の限り（サボりやらイタズラやら）を尽くしてきた。

そんなS局N極の様な、犬と猫は現在場所を変えて公園に来ていた。大きな噴水の前でデビューもしていない素人バンドグループが楽器をジャカジャカ鳴らして野外ライブを行っている。客もそこそこ集まって、数人の客はギターケースにお捻りを投げ込んでいる。

ま、今の二人には何ら関係のない話だったか。

「お前、知っているのか？」

普段ならどんな相手にも敬語を使っている山吹だが、どういう事なのか緋村と話するときだけは気持ちが砕けてタメ口になってしまう。

緋村はまるで興味の無いような生返事を返すと、山吹が話を続けた。

「先月このあたりの国々を担当していたサンタ、つまり寺井さんがサンタ業を引退された」

「んああ、知ってんよ。あの髭ジジイからしばらく前に電話貰ったからなあ・・・」

緋村は缶コーヒーを飲みほしながら、低いトーンの声で答えてやった。ちなみに髭ジジイとはサンタ連盟の会長のことで、緋村はその会長にスカウトされた間柄を持っている。つまり緋村は会長直々の弟子、教え子ということになっている。

「だったら聞いているハズだろ。お前が次の東アジア担当のサンタクロスに指名されたことくらい」

「ああ、そういやジジイもそんなこと言ってたっけかな・・・。で～もよ・・・」

空になった缶をポイツと投げ捨て、クズ籠に一発でホールインワンした。そのままこんどはポケットの中から煙草を取り出すと、火をつけて煙を肺の中いっぱい吸い込んだ。

そして煙を一気に吐き出すと、続けるようにこう言った。

「誰がそんな事やるかボケって言ってやった」

あっけらかんと爆弾発言をしてしまった。そんなばかげた発言を聞いておいて、黙っている山吹ではない。

しばらくの間目を閉じていたが、次第に山吹は唇をかみしめ、布袋を握りしめた。明らかに強い感情を抑えきれない様子が見て取れる。

「お前はいつもそうだったよなあ・・・いつもいつもそうやって上から目線で物を見て、人を小馬鹿にしてよう。あの時だってそうだったよなあ、西アジア地区のサンタクロースの時期継承も本来ならお前が継ぐはずだったのに、それが面倒くさいから嫌だと言って断ったよな。」

山吹はスチール製のコーヒー缶を握りつぶすと、声と強めて続けた。

「何度交渉しても首を振らなかった代わりに、お前のすぐ下にいた僕が担当することになった。だがそれはボクにとっては侮辱でしかなかったんだよ！」

実力があるのに仕事を拒否した。それでは仕方がないからランクを一つ下げてコイツにしよう。西アジアのサンタクロースを命じられた時、山吹はそう感じた。

自分はどんなに頑張ったところで、この男には勝てなかった。ならばいつか勝てるまで努力を続けるだけだった。そう心に誓った矢先のこの仕打ち、山吹のプライドはこの瞬間ズタズタにされた。それがどうしても許すことができなかった。

まるで、努力しているこっちがバカみたいに見えてきて、腹立たしかった。

「一体なぜなんだ緋村、なぜいつもいつも本当のサンタになることを拒むんだ！？ボクはなあ、昔からお前の考えてい

ることの根源がサッパリわからないんだ。答えてくれ・・・いや答えろ！」

「熱くなんなよ。・・・人をバカにする理由・・・」

「それはな、

バカにされた相手の反応を見るのが楽しいからだ。」

緋村の答えを聞いた途端、山吹の中の何かが音を立てて千切れた。山吹は額に青筋を浮かべて急に立ち上がると、布袋のひもを解いた。袋の中に収納されていた物が正体を現した。布袋の正体は、黒塗り鞘の刀だった。山吹は何かに取り憑かれたような鬼気迫る表情のまま躊躇いなく刃を抜くと、居合抜きのようなスピードでまっすぐに緋村の喉へめがけて放った。寸止めのつもりなのだろうが、その刃には微弱にも殺意さえ込められている。

しかし

ギャリイン！！

刃が喉に達する直前、耳障りな激しい金属音が二人の鼓膜を刺激した。

山吹の一撃を受け止めたのは、緋村が直前に引き抜いた銃だった。しかもそれは米軍御用達の軍用銃、ベレッタM92という拳銃だ。二人のエモノは鏝迫り合いする様にギャリギャリと擦れ合って動きを止めている。

なぜ二人がこんな危険なものを普通に所持しているのかということ……、それは今は話せない。それこそ、サンタの事情としか今は言いようがない。

とにかく、今の山吹は強烈な殺気を漲らせ、冷静さを完全に失った狂犬の様な眼をしている。反して、緋村の表情はいたって落ち着いている。その余裕すらうかがえるような顔には、氷の様な冷たさを持っていた。

「ふざけたことを言うのも大概にしておけよ緋村……。サンタクローズとしての仕事が、一体どれだけの大義を持っていると思っているんだ？」

「仕事だ大義だ、そんなのオレにゃ関係無いんだよ。自分が一番知ってるはずだぜ？オレは自由な猫、お前は忠犬だ。オレはやりたいことだけを自由にやる、それだけだよ」

怒り狂う山吹に対し、緋村はハッキリと言い払った。その言葉には、一片の曇りも、一切の情も感じない、あまりにも冷たすぎる言葉だった。

しかし緋村の言っていることが冗談でなければ、またこうして本気になっている自分がバカみたいではないか？そう思うと、山吹の頭にまた血が上ってくる。血液が沸騰し、刀に込める力が増してゆく。

「オレとガチでまた喧嘩する気だったら、やめときな。お前、昔から俺だけには喧嘩で勝ったことねえだろ？」

緋村は歪んだ山吹の表情から心理を巧みに読み取ると、懐からもう一丁、同じベレッタを引き抜いて銃口を山吹の額へまっすぐに向けた。

この二人は、いつもこんな感じだった。何か二人の間で問題が起こるたびに山吹が刀を振るい、緋村が返り討ちになっている。喧嘩の成績も今まで緋村の全戦全勝。

彼の言う通り、山吹は未だかつて勝ったことが無い。

山吹は少し昔のことを思い出すと、仕方なさそうに舌打ちをし、刀を納めた。緋村も人の目に触れないうちに、銃をコートの下ホルダーに仕舞った。

頭の中の血を少しずつ冷やしながらか、大きなタメ息をついた。それからポケットの中から何か小さなりモコンの様な物を取り出すと、いくつも並んでいるボタンの内の一つを押した。

すると、どこからともなくドサッと物が落ちる音がして、緋村の足元に紙袋が落ちてきた。このリモコンが何なのかは詳しく言えないが、要するにサンタクローズの便利アイテムと思ってくれれば問題ない。

紙袋の中身をのぞいてみると、中には赤いフワフワした服と帽子、ブーツまで入っていた。一目見て、これがサンタクローズの制服だと分かった。

「なんだこりゃ？」

「会長からお前へのプレゼントだそうだ、確か渡したからな。仮に気が変わったら直接電話をよこせ、とのことだ。じゃあな・・・」

山吹はその後刀を布に仕舞うと、そのまま背を向けてどこかへ去ってしまった。

あれから小一時間後、緋村は静かな住宅街を一人歩いていた。さすがにここまで離れればクリソンの無限ライブは聞こえてこない。

ただ、やはり周囲の家には何処も彼処も揃いにそろってメリークリスマスな飾り付けでいっぱいだ。植木にまで巻きつけられた電飾がウザいくらいに眩しい。

サンタの気持ちも知らない癖に、よくもまあやるもんだぜ、と、内心そう呟いた。

こんなものではできるだけ見ないようにしながら歩いていると、ようやく自分の家が見えてきた。いや、正確には家ではない、アパートだ。

築19年、二階建ての共同安アパート、それが緋村の住まいだ。現在はバイトで生計を立ててなんとか暮らしている。安アパートといっても、こう見えて生活はギリギリだ。

ふと思い出してみれば、右手にはサンタの衣装が入った紙袋がある。この衣装は思いの他上質な布地を使った高級品質の衣装であるから、いっそのこと売っ払って金に換えた方が良くないか？なんて危険なことを考えだした。でもそんな事が山吹にでもバレたら、いくら掛けてでも買い戻してまた持って来るかもしれない。そんな時はきっと長〜い説教ももれなくついてくることだろう。それだけは勘弁だからやっぱりやめておこう。

アイツは頭が固いし、クソマジメだからなー、なんて考えながら歩いていると、アパートの門の前で足が止まった。門前に、何やら黒塗りのデカイ車が路上駐車されていた。しかもこの車、世界に名高き名車の一つ、「ベンツ」ってやつではないか。テレビドラマやアニメなんかで見たことはあるが、本物を生で見るとはこの日が初めてだった。

しっかしまた何でこんな高級車がこんなボロアパートの前に停まっているのだろうか？こんなのに乗っている奴はこの世に3種類の間人しかいない。

A：金を持って余している成金

B：頭の悪い政治家

C：今日からヤのつく自由業

ってところだろう。

まあしかし、いろいろと思考を巡らせたところで、ベンツが停まってようがフェラーリが停まっていようが、自分には全く関係ない話だ。だけどせっかくだし、今はこの珍しい車を少し鑑賞してみよう。

緋村は都会に上がってきたばかりの地方出身者の様に、車を横から、後ろから、前からグルグルと回りながら鑑賞した。なるほど、高級車の名前を欲しいがままにするだけのことはある。車体そのものの美しさももとより、ガラスにもホイールにも、ついでにワイパーやライトにまで手入れが行き届いてピカピカだ。全体のガラスはスモークガラスというやつなのか、車内が全く見えない様になっている。

こんなものを買うとなったら、きっとかなりするんだろうな〜……。と関心していたその時、後ろからポンッと肩に誰かの手が置かれた。

何気なく振り返ってみたら、緋村の背後には顔面に深い傷を持った髭の男と、サングラスをかけたパンチパーマの男がものすごい形相で緋村を見下ろしていた。

「オイコラ兄ちゃん…ワイの車になんぞ用か、ああ？」

「……………」

正解は、C：今日からヤのつく自由業でした！！！！

さすがにこれには焦りを隠せない緋村は、無抵抗の印として両手を上げながらゆ〜っくりと体をまっすぐに向けた。それでも二人の男はまだものすごい顔をしたままだ。

「いや、その…………ボクこのアパートに住んでいるただの善良な車好きです。こんなところに珍しい車がある

な〜っと思ってつい・・・はい」

緋村の口から出てきたとっさの言い訳「車好き」、これを聞いた途端、髭の方の片眉がピクリと動いた。何かマズイ事でも言ったのだろうか？

「兄ちゃん...車好きなのか？」

「ええ、まあ。最近かじりだしたモグリみたいなもんですけど・・・」

なんだか変な所に食いつかれてしまったようだ。もちろん緋村は車に関する知識など運転免許くらいの知識しか持っていない。

「そうけえそうけえ、車が好きかい。どや、ワイのベントは？」

髭はニヤリと口元を緩めると、バン！と車の屋根に手を置いて尋ねてきた。とっさの言い訳のハズだったのに、なんか車好きと聞いて機嫌がよくなってきているようだった。これは大失敗。

「えっと・・・すごく綺麗ッスね！ボディからホイールまでピカピカで、ものすごく大切にしてるみたいッスね〜。これって新車なんスか？」

迷いに迷った挙句、我ながら歯がガツタガタに浮き上がってむしろ抜け落ちてしまいそうになるくらいのお世辞を並べてみた。

ああ、我ながらバカみたいだ。

「あんちゃんなかなかお目が高いじゃねえか。この車はなあ、アニキが三日前に買って納車されたばかりのベンツで、しかも今日がその初運転なんだぜ。まだこれでも20kmも走っちゃいなぜ。」

「よせよ、照れるじゃねえか！」

訂正しよう。オレの馬鹿！！

予想をはるかに上回る勢いで喜び始め、なんか車自慢までされてしまった。しかも照れてるし。その後も少し車について自慢話に付き合い、相手が笑ったらこっちも笑ったりして常にご機嫌をうかがい続けた。

頃合いを見てそろそろ別の言い訳を考えてこの場から逃げようかな、と思った時に、なぜか髭が後部座席のドアを開けてくれた。

え・・・？これってまさか・・・。

「どや兄ちゃん、生れて初のベンツ、乗ってみるかい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

やりすぎた！！！！！！

オレの馬鹿！！バカは死ななきゃ治らないんだよ！！

この髭とグラサンの機嫌を、あまり過激に取りすぎてしまった。髭の顔を怯えるような表情で確認してみたが、髭はニヤニヤと自然に近い笑顔をしている。どうやら悪意も無ければ特別深い意味も無いようで、ただ単に同じ車好きとしての御好意としての行動のようだった。

だがどうしても、こんなおっかないオジさんの黒塗りの車に乗せられるという光景は、テレビの見すぎかもしれないが危険な香りがプンプンしてならない。自分の中で死亡フラグが新幹線並み・・・いや、飛行機の離陸速度並の速さで急上昇していくのを感じた。

「あの・・・すみません。すごく嬉しいんですけど今日は、ちょいとこの後バイトがあるんで・・・」

新たなる言い訳を、自分の今握っている物を見た瞬間に思いついた。緋村はさっきよこされたサンタの衣装の入った紙袋を二人に広げて見せた。すると二人は同時に

「ああ・・・」と納得してくれたようだ。

「そら残念やな、ここまで話の合う輩にあうんは久々やのになあ。」

「ほなあんちゃんも頑張って金溜めて、アニキみたいに高級車乗りまわせるように頑張んなよ！」

「はい・・・精進します。」

何か将来を期待されるような発言を残されたが、何とかこの危機から逃れることができたようだ。これからバイトと言ってしまった手前、そそくさと家の中に入るのは不自然だろう。ここは仕方なしにその辺をこの二人に見つからないようにブラブラしてからまた帰ろう。面倒だがそれが一番安全だ。しかし生きた心地がしない。

破裂しかけていた心臓の鼓動を何とか抑えようとしていると、今度はアパートの方から何か派手な音が響いてきた。

まず聞こえてきたのは、何かを強くたたきつける音、きっとこれは部屋の扉を乱暴に開けた時の音だろう。

続いて男の悲鳴と激しい怒鳴り声、人体を殴った時に出る特有の鈍い音。

最後にカンカンと階段を下りてくる乾いた革靴の音。

やってきたのは、この二人とは身なりがだいぶ違う中年の男性だった。スーツにオールバック、そして犯罪者特有の鋭

い眼光と三白眼。こちらへ向かいながら声をかけると、二人が頭を下げたことから三人は関係者だとわかる。この男はきっとこの二人より上の立場の人間なのだろう。

よく見ると、その男の肩の上には小さな女の子が一人米俵の様に担がれていた。この状態で騒がないとなると、きっとお昼寝中なのだろう。その眠りが自然の物なのか故意によるものなのかは、別の話として。

「お疲れさんです、工藤さん。いかがでしたかい？」

「駄目だ、あのクソまだ金はできてなかったわ。このガキは担保として任意で預かってきたわ。例の港んところで業者呼んどけ。」

この工藤と呼ばれた男は、かなり威圧感のあるドスの利いた声で命令すると、子供を先に中に放り込んでから車に乗った。グラサンがドアを閉めると、二人は急いで助手席と運転席に回ってエンジンをかけ始めた

「えっと、お兄さんの仕事って・・・なんスか？」。

緋村は助手席に座ろうとしていたグラサンを捕まえて手短かに質問した。グラサンはニヤリと口元を歪めると、一枚の名刺を出しながら何事もなく答えてくれた。

「要は金貸し屋や。あんちゃんも何か困ったことがあったらここに電話しい。良心的に金貸してやるさかい」

名刺にはグラサンの名前と、「真緒（マソウ）金融協会」と書いてあった。グラサンはそのまま車に乗り込み、「ほなな」と手を振ると、一瞬タイヤを空回りさせるほどの加速力で走り去ってしまった。道交法なんか糞喰らえと言っているかのような、豪快な運転だ。

残されたのは名刺とタイヤの跡、（新車って言ってたっけ）、そして環境には最悪な排気ガスだけだった。

話を総合すると、要するにあの三人は金融関係の取立人、ほいで今日は貸した金の集金日。しかし今日はいくら取り立てたくても金を持っていなかった代わりにあの女の子をもらって言った・・・と。

なんともまあ、同情でも引くような話だわな。

「千草！千草ああ！！」

すると突然、アパートから転がる様に一人の男が飛び出してきた。門の前でキョロキョロとあちこちを見回すと、急に膝を落として泣き崩れ出した。時折口からさっき叫んでいた「千草」という単語が出てくる。

考えるに、この男が借金の取り立てを受けた人だろう、あの工藤に殴られたのであろう顔の痣も目立っている。

だがよく見てみれば、この男見覚えがある。以前、大家さんの好意でアパートの住人みんなが集まって飲み会をした時に見た顔だ。確かバツイチで、娘さんと二人で生活していたと記憶しているが・・・。まさかこの人があんなヤバそうな金融会社から借金していたとは。

・・・なるほど、話が見えてきた。さっき工藤は任意で娘さんを預かったと言っていたが、こんな姿を見てもなお任意などとは思えない。工藤がこの親父さんを殴ったのは金が無いことに腹を立てただけではなく、娘を強引に連れて行こうとした時に食い下がった親父さんを引き剥がそうとしたんだ。

親父さんはもうあの車の何処にも見えないことを悟り、娘の名前を何度も叫びながら泣き続けた。その余りにもみじめで情けない後ろ姿を、緋村は冷やかな視線で見続けた。頭の中では、「自業自得」の言葉を浮かべながら。

胸糞悪い・・・。

その日の夜、緋村は自分の部屋でこたつに寝っ転がりながら考え事をしていた。

「サンタクロースとは、人々に幸せと幸福を与える者。

それが子供でも大人でも」

サンタクロースの修行を始めたとき、一番最初に叩き込まれたことがこの言葉だった。だけど緋村はそれがなんとなく気に入らなかった。サンタクロースとして仕事を初めて任せられそうになった時「面倒くさい」とだけ言って断ったが、本当の所、人に幸せを届けるなんてことが嫌で断った。

自分の心情的には、人に幸せを運んだところで、自分には何の見返りも望めないということに嫌悪していた。

「自分にも得にならないことには絶対にしない」、それが今まで緋村が貫いてきた主義だ。だから修行だってやりたいようにやってきたし、そんなこんなで一応卒業だって出来ている。スカウトされた時は色々な事情があって臨んだが、時が経つに連れて当時の気持ちが消えていった気がしていた。

今だってもうヤル気なんか起きない。だからいくら頼まれたところでサンタなんかやってたまるか。

・・・
・・・
・・・

大体そもそも、緋村は本来クリスマス自体が好きになれない。クリスマスになると思いだすのは、幼少時代に体験したあの恐怖だけだからだ。

当時11歳、このころの緋村はまだクリスマスは大好きなただの子供だった。親と一緒にテーブルを囲み、一緒にケーキを食べながら笑って暮らす。ありきたりで、どこにでもある風景ではあったが、そんなのが緋村は好きだった。

そう、この日までは・・・。

当時の12月25日、クリスマス当日に、緋村はたった一つの衝撃を受けた。

クリスマスプレゼントを買いに息子には内緒で出かけていた両親がプレゼントを買った帰り道、事故で死んだ。

死因は交通事故による全身と頭部の強打、大量出血に伴うショック死。

二人とも打ち所がかなり悪かったらしく、即死だった。

事故の原因は運転手側の飲酒運転、そして路面凍結によるタイヤのスリップ。浮かれて酒を飲んで運転していたらタイヤが滑り、運転をミスしてしまったのだった。

緋村はこれまで大好きだったはずのクリスマスに、この世で一番大好きだった二人を同時に失った。これをきっかけに、この世で一番クリスマスが嫌いになってしまったのだった

親戚も身寄りも無かった彼は両親の死後、葬式も満足にできぬまま、亡骸をまともな墓の下に埋めてやることも叶わないまま、半ば強制的に施設に送られることとなり、残りの人生をここで過ごすことが無理やり決定させられた。

なぜこんなことになったのか何も解らないまま、訳の解らぬまま見たこともない場所に押し付けられた彼には友達さえもできず、半年とかからず・・・

壊れた

だが、今緋村がこうして無事に生きていられるのは、完全に壊れてしまう一歩手前の所で、天国へ繋がるクモの糸を垂らしてくれた人物がいたからだ。

それが、現在のサンタクロース協会の会長だった。

たった一言、『ついてくる気はないか?』と語りかけてきた。緋村はその言葉に惹かれるものを感じ、施設を飛び出し

でサンタクロースになろうとすることで、今の自分になることができた。

しかしざサンタクロースになってみると、思っていた程の充実感を感じず、今現在に至るわけだ。

だから、クリスマスは本当は超・撃・バリ・大っっっ嫌いだ。

・・・
・・・
・・・

なんとなく窓をのぞいてみる。ここからなアパートの門が見える。

トップリ日が暮れた外の門には、さっきの親父さんの代わりに大家さんが焚き火を焚いて焼き芋なんか作っていやがった。

そう言やなんか腹減ったなあ。

親父さん、泣くだけ泣いて部屋に戻ったのかな？大切な娘さんを亡くしたショック自殺なんかしてないだろうか・・・

。

ま、いくらなんでもそりゃ考えすぎか。

・・・
・・・
・・・

「・・・オレには関係ないね」

・・・
・・・
・・・

またしばらくの間、部屋中に無音という音が鳴り響いた。

いくら引っぺがそうとしても、頭の中で親父さんの姿が離れようとしない。

あの悲痛な叫びと鳴き声が、頭ん中にこびりつき、徐々に拡大し、終いには鳴き声のオーケストラ会場が脳内に建設されて演奏会まで始めやがる。

・・・
・・・
・・・

この世で最も大切な存在を失う事この心苦しき、切なさ、悔しさ、悲しさ、惨めさ・・・。胸が痛くなる程よく知っている。

ガキの頃同じ施設の子供に馬鹿にされた時、後先考えずその場にあったスコップでそいつをタコ殴りにして病院に送ってやったことがあった。

その後一カ月、少年院に連れ込まれたが緋村の精神は荒み、煤け、捻じれ、歪み、真っ黒くなる一方だったことを思い出す。

急にあの親父さんの悲しい背中と、自分の幼少期の背中が被ってしまったような気がした。

あの背中、よく似ている・・・のか？

・・・いや、気のせいだろ、どうせ。

そう自分に言い聞かせて、このまま今日は寝てしまおうと眼を閉じた。

頭で解っていても、体が動いてしまう。そんな古臭い例え話が、今ここで動こうとした。

緋村はこたつから飛び起きると、しっかりスイッチを切って立ち上がった。そしてなぜかその場で服を脱ぎ捨て肌着姿になると、売り払う予定だった紙袋の中身を畳の上にプチ捲けた。

まずズボンに手をかけると、緋村はそれを穿く前にズボンの内側に手を突っ込み、裏地を引っ張り上げて裏表を逆にしだした。ズボンの裏地は真っ黒く、今の緋村と同じ感情の色をしていた。

それを穿くと今度は上着もズボンの同様に裏表を反対にしてシャツを一枚着た上で袖を通すとどうだろうか、そこには世にも奇妙な、黒いサンタクロースが誕生してしまった。

さらに前ボタンを締める前に、公園で見せたあのベレッタの収まったホルダーを両脇にそれぞれ一丁ずつブラ下げた。帽子は被らず、ブーツの内側に予備のマガジンを数本隠して穿き、腰のベルトをキツく締めあげる。とたん、緋村の表情が大きく変わった。先程までの死んだ魚の様な眼ではない、公園で山吹と対峙した時と同じ、氷の様に冷たく鋭い光放った眼をしている。

今まで山吹よりも硬かった自分の頭の中で、何かの決心がついた。

部屋の電気を消してしっかりドアの鍵も閉めると、緋村は窓へ向かった。季節になると隙間風のヒドイ窓を開け広げると、冬の冷たい風が吹き込んで素肌が刺されるような寒さに身を震わせた。

しかしそんな事お構いなしに、アルミサッシの上に足をかけるとそこから一気に飛び降りた。この部屋は二階で、高さは裕に8mはある。死んでしまうような高さではないが、失敗すれば足くらい折れてしまいかねない高さだ。

だが、そんな心配は緋村にとって無用である。緋村は空中で一回転すると、スッと音もなく冷たいアスファルトの上に無事着地してみせた。

「高いところから飛び降り、足音を立てずに着地する」、サンタクロースの必修科目の一つみたいなものだ。辺りの気配を探り、誰の視線も無いことを確認すると、今度はその場で腕を組んでなぜか仁王立ちし始めた。

「・・・なんか用か」

何処にも人一人いないことは確認済みなのだが、緋村は突然どこかへ向けて話しかけだした。

すると、アパートの屋根の上から何かが降りてきた。それは先程の緋村と同じように、足音を全くさせずに着地した。その正体は山吹だった。今の山吹は緋村と同じように、黒いサンタの衣装をまもって片手には刀の収まった布袋を携えている。

「いつから居やがったんだ？」

「最初からさ。滑稽だったな、車好きの話に花を咲かせるお前の姿は」

どうやら本当に最初からずっといたようだ。思うにこいつはハナから緋村の後を尾ける気で満々だったらしい。

「事情は大体理解している。加勢してやるよ」

山吹は緋村の側まで寄ってくると、ヒモを解いて露出した刀でポンポンと肩をたたいた。

しかしそのセリフを緋村は鼻で笑ってやった。

「規模がどんなくらいかは知らねえが、お前の手なんかいらねえよ」

「ボクも一緒に連れて行けば、面白い特典を付けてやるぞ？」

いつもの山吹にしては妙に勿体ぶった言い方をする。そこにあの時と同じ便利なりモコンを取り出すと、ポチッと押した。

.....

少し時間をおいて一瞬だけ瞬きで目を閉じ、もう一度眼を開いたところで、この一瞬の間まではそこに存在しなかったはずの物が姿を現した。

それはサンタクロース専用のカスタムマシンで、これはその大型バイクだった。モデル車種はシャドウカスタム400。しかもサイドカーまでついていやがる。

「本来ならここまで渡す気は無かったんだが、これも会長からの粋なはからいの一つだ。くれてやってもいいが、条件としてボクも付いていくぞ」

「……ふう、OK。じゃあさっさと行くぞ犬っコロ」

「命令するな糞ネコ」

お互いを罵倒しながら、二人はそれぞれのシートに乗り込んだ。運転するのは緋村で、サイドには山吹が乗る。キーを回してエンジンをかけると、車体全体から凄まじいエンジン音が轟いた。シートがエンジンの鼓動で激しく上下し、座る尻が痺れそうだ。

尚、確認しておくがバイクの運転に関してもサンタの必修科目の一つとされているので、緋村の山吹もバイクの運転免許をしっかりと持っている。

エンジンが温まる間、二人は常備されていたグローブとゴーグルを装着して出発に備えた。

「……そろそろ行くか？」

「ああ……」

全ての準備が整うと、早速アクセルを回し、爆発的な排気音を轟かせて発進した。アパートの門を出ると、誰もいない直線の道路をグングン加速しながら走らせる。

寒いをブッチ切りで通り越してむしろ痛いくらいも風を全身で浴びながらメーターを確認すると、すでにこのバイクは時速120km/hまでになっている。

どうやらそろそろ頃合いのようだ。緋村はハンドルを握る力を強め、体重を前方向へずらした。これを見ていた山吹は、自然と身をかがめて安全な姿勢をとる。

「飛ぶぞコラァ！！」

全身の力を集中させ、体重を一気に後ろに移動すると、バイクのフロント部分が持ち上がった。するとどうだ、バイクの持ち上がる角度が走るたびに徐々に急になり、最終的には後輪までもが宙に浮き始めた。

バイクはそのまま時速120kmのまま空へ向かって上昇し続け、とうとうバイクは雲のすぐ側まで飛び上がってしまった。

高度が安定してくるとバイクは上昇をやめ水平飛行となり、はたから見れば「空中を走るバイク」が完成してしまった。

「うううう、寒びい寒びい！ああ～、これだから嫌なんだよサンタの仕事ってのは」

「文句垂れるな。それより、どこへ向かうつもりなんだ？」

「ああ、港だ。連中、港に業者を呼どけと言ってたからなあ。ヤバい関係の取引が行われる港つつたら……」

「……あそこしか無いか」

目的地が決定すると、アクセルを一気に回して加速し、一路目標となった港へ向かって猛ダッシュした。空を走っているから渋滞に巻き込まれることもないし、なにしろ早くて楽に辿り着けるのが何よりだ。

この二人の姿は、地上から見ることはとてつもなく困難だが仮に見えたとするなら、まさにソリに跨ったサンタクロースに見えなくもない。

首都圏から少し離れたところにある、某港。ここには世界各地の輸入輸出される違法物の密輸やら危険な取引が行われるともっぱら噂になっている危険な場所である。

その危険性に関してはお墨付きであり、小学校でもここには絶対に近づいてはいけないと注意されてしまうくらい危険地帯なのだ。

ここがそれだけ危ないと解っていながらもここで動かされる金額や利益は時として莫大であり、政府の役人はここに一枚噛んでいるせいもあって警察も簡単には踏み込んで一斉検挙することができなくなってしまっている始末なのだ。とにかくここはヤバ過ぎる。

そんなエリア51クラスに危険な土地に、二人のサンタは舞い降りていた。

二人はサンタクロースの掟、『姿を決して見られてはならない』に従い、足音も気配も消し去ってコンテナの影に隠れながら走った。

二人が目指しているのは、外国船が停泊している貨物倉庫。この中には生活用品から人に見られてはいけないヤバいものまでゴツソリと眠っている。その中の一つ、13番倉庫に的を絞った。ここには周りの倉庫よりも止まっている車やトラックの数が明らかに違い、見張りまで立っている。高い確率で取引が行われていそうな臭いがする。きっとあの娘さんも居るはずだ。

「で、ここまで来たはいいが、これからどうするつもりだ？」

13番倉庫前のコンテナの影で、二人は作戦を立てていた。そっと覗きこんでみると、倉庫の入り口に立っている見張りは一人だけだった。よく観察すると一応銃も隠し持っている。始末するのは簡単だが、できるだけ気付かれないようにしたいというのが山吹の意見だった。

「どうもこうもねえよ……。黒いサンタの意味、知ってんだろ？」

「……………ああ」

「オシ、オレが先に行くから後から来いよ」

「ハイハイ、下手扱くなよ」

「オウ」

全ての準備が整うと、二人はお互いの拳をぶつけて健闘を祈り合った。

緋村はポケットに両手を突っ込むと、そのままワザとらしく口笛を吹きながらコンテナから出て13番倉庫へ向かって歩き出した。

少し近づいてきたところで、見張りの男が緋村に気がついた。

「オイ、それ以上ここに近づくな！」

見張りの男はここへ近づいてくる不審な男に制止させようとしたが、緋村は聞こえないフリをしてトコトコと歩を進め続けた。10mも近づいてきた頃には見張りの男も頭にきて、とうとうポケットから拳銃を引き抜いて脅すように声を荒らげた。

「こっちに来んなって言ってんのが聞こえねえのかテメエは、尻の穴増やされてえのかこのガキ!？」

「おっと失礼失礼!もう近付かないから物騒な物仕舞ってくださいよ～。怪しい者じゃござんせん～！」

明らかに胡散臭い口調で両手をヒラヒラと上げ、自分は別に怪しい人物ではないことをアピールするが……

「信じられるかボケェ!めちゃくちゃ怪しいわい!!」

逆効果だった。

もうこうなったら仕方無い、予定を少し変更してさっさと行動に入ることにした。

「すみませんあ。まァこのナリ見ればわかると思うんですけどね、あっしはこのクリスマス期間にあちこちでクイズを出して正解者に商品を配ろうってバイトしてる者なんですけどね」

「はあ？」

「あっしの難しいクイズに答えることのできた人には、このサンタクロースからこんなプレゼントを差し上げや〜す！」

そう言うと、緋村はポケットの中をゴソゴソとまさぐり、中から何かを取り出した。

顔を出したのは、なんと福沢諭吉の肖像画紙幣、しかも十人一個小隊であった。要するに、十萬円の札束だ。これを見せられた見張りは自分の仕事を完全に忘れ去り、札束に目が釘付けにされた。

離れている山吹にもその様子は見えていたが、なぜ緋村があんな大金を所持しているのか不思議だった。

が、自分の財布の厚みが減っているのを知り、後で折檻することを硬く誓った。

「マジでか!？」

「マジです。うちの雇い主がね〜、昭和初期の成金みたいなクズ野郎でね、捨てるくらい金がありすぎて困ってるなんてほざきやがってね〜。ほんと殺したいわ〜」

「殺したいのはお前だ・・・」と山吹は今すぐにでも飛び出してアイツを三枚おろしにでもしてやりたかったが、必死でこらえた。人の金で好き勝手言ってくれているが、今月の生活費と家賃の支払い用の金なんだぞ？あの十万。

「金が貰えると聞いたら話は別だ、早速クイズを出してくれや！」

「ハイハ〜イ！それでは問題です。（ダダン！）」

『あるところに、鹿の群れがいました。ある日鹿が散歩をしているとなんと足元から埋蔵金の発見してしまった。それを見た鹿とその仲間の鹿達は、この後何を起こしたのでしょうか？』

「制限時間は一分間、レッツシンキングタイム！！」

「はぁ??？」

埋蔵金を見つけた鹿達がこの後起こしたこと？この問題を聞いた男も、山吹も男もそろって頭を抱えて考えた。

何が何やらさっぱり理解できず、クイズを聞き直したり、ヒントを要求したがそれは却下された。

使い慣れていない頭を必死で回転させてみるがほとんど答えが見えず、そのまま一分というあまりにも短すぎる時間は過ぎ去ってしまった。

「はいブブー！！時間切れええ！！終————了————！！」

「だあクソオ、解んねえ！！」

男は地団太を踏んで本気で悔しがった。まあ十万なんて大金を目の前にして貰えなかっただって悔しいに決まってる。

金は惜しくないが、あの緋村が出したクイズが解けなかったというだけで、山吹のなんか悔しく思っていた。

「サンタのあんちゃんよう、もう金はいいからさあ、答え教えてください。これわかんねえと今夜気になって眠れそうにねえぜ」

「簡単だけどなあ・・・まあいいや。答えは今からあっしがしようとしてることで、漢字一文字ですよ。『鹿』の、足元に、『金』があったんです」

「足元に・・・漢字？」

「そう、『足元』に、『金』です」

緋村が出したヒントを元に、山吹もちょっと考えてみた。

鹿の足元に金・・・。漢字・・・。『鹿』という字の足元に、『金』の文字・・・。出来上がった漢字は・・・あれ？

「鹿の下に金・・・てことは・・・へ？」

「そう、答えは・・・」

麩（みなごろし）

答えが解ってしまった時には、もう遅かった。

男はこの答えが何を意味しているのか理解する前に、緋村が素早く抜いたベレッタの弾丸に顔面を撃ち抜かれてしまった。悲鳴を上げる暇すら与えられず、男は目と目の間から噴水のように鮮血を噴き出し倒れ、即死した。

緋村が最後にこの銃を撃った日から随分と久しく、感覚を思い出すと思わずニヤリと笑みが浮かんでしまった。まだこの両手には昔の感覚がしみ込んでいたようだ。

銃を握ったまま男を足蹴にしながら進み、正面のこのクソデカイ鉄扉の前でしばらく仁王立ちしながら待っていると、やがて今の銃声を聞いて何があったのか確かめに来た男二人がゴロゴロと扉を開けて外に覗きこんできた。その瞬間を狙い、両手に収まっていたベレッタが火を噴いた。

それぞれ3発ずつ、正確に男の胸を撃ち抜くと、無駄な体力を使う事無く簡単に倉庫へ侵入成功となった。

緋村は至極満足そうな表情で銃を指で優雅にスピンさせながら倉庫の中へ足を運んだ。

どうやら緋村の予想はビンゴだった。学校の体育館が余裕で2つはスッポリ入りきってしまいそうなくらい巨大な倉庫のちょうど真ん中では、それ相応の格好をしてヤバそうな面持ちをしている複数のおっさん達がテーブルを挟み、何かの商談をしている様子だった。長テーブルの上に散乱しているのは、見たことも無い様な枚数の札束の山、トランクに敷き詰められた白い粉の真空パック多数、緋村には馴染みの深いチャカやハジキ玉が大量。そして肝心だったあの持っていかれた女の子もいる。今は大きな鳥籠の様な檻の中にハムスターの様な扱いで閉じ込められていた。タオルをかぶって横たわっているところを見ると、まだ眠っているみたいだ。

「は〜い皆さんこんばんは〜、そんでもってメリ〜クリスマス〜ス！」

緋村は指に銃を引っかけたまま両手を万歳する様に上げ、ヘラヘラと笑いながらおっさん達の群れに歩み寄った。

「止まらんかいガキィ！！」

おっさん達はこの声を皮切りに、一斉に自分のポケットや懐からチャカを抜き、銃口を全て緋村へと向けた。この緊張感だけならば、さっきの門前の男の比ではない。

こっちの方が遙かにおっかないに決まっている。緋村に向けられた銃口の数、ざっと数えただけでも40は軽くある。

「ワレ、どこの組の者じゃコラ？サンタみてえなフザケた格好で何しに来たんじゃ？」

真っ先に制止をかけた男がゆっくりを銃をこちらに向けながら、そう問いかけてきた。よく見てみればこの男、夕方に緋村のアパートから出てきて女の子を担いで来た工藤と呼ばれていた男ではないか。そうと解れば、こっちとしては好都合だ。

「いやぁ失礼失礼。さすがは今夜は天下のクリスマス・イブなだけはあるねえ。御宅らサンタさんもプレゼント包装に忙しそうだねえ。精が出るねえ」

バキューン！！

一発の鉛玉が工藤の銃から発射され、両脚の隙間に命中し足元のコンクリートに煙を上げながら穴が開いた。

「どこの世界にチャカ2挺もブラ下げて人撃ち殺すようなサンタがいるんじゃコラ……。さてはワレ極東組の人間やな？」

「サンタがチャカブラ下げてて何の問題があるんだよ旦那？それになぁ、サンタってのは二通りの仕事があるんだぜ？」

「あぁ？」

「サンタクローズってのはな、良い子にはその子の欲しいと思っている物をプレゼントする……。

けど悪い子にはな、不幸のプレゼント……石炭を送るんだよ……こんな風にね！！」

緋村は一瞬口元を怪しく歪めると、銃を正面に構えて躊躇い無くブツ放した。倉庫全体に二つの銃声が反響すると、立っていた二人の男が銃を取り落とし、血を流して唸り声を上げながら床に倒れた。

この銃声がゴングの代わりを果たすと、全員が一斉に吠え上がり、緋村へ向けて銃弾を発射し始めた。初めからこうなることをあらかじめ予測していた緋村は横っ飛びでこの攻撃を回避、流れ弾が味方同士にぶつかり合い、これで数がだいぶ減った。すかさずに空中で回転しながらお返しと言わんばかりにトドメの一撃を食らわしながら、緋村は倉庫の中を走り回った。

外ではこの銃撃戦の音が合図となり、コンテナの陰に隠れていた山吹がスッと立ち上がった。入口に転がっている数人の死体を踏みつけながら鉄火場と化している倉庫の中に突入すると、風にも等しい速さで相手との距離を縮め、擦れ違いざまにヤクザ共の首や腕、胴体を目認不能の速さで両断した。

これこそ努力の天才、山吹 望が編み出した我流居合抜刀術、『疾強風』という技だ。

思いもかけぬ敵の増援に意識が乱された時、すかさずに緋村はマガジンに残ったありったけの弾丸を乱射し、正確にヤクザ共の急所を撃ち抜いてやった。

集中力の散漫になったバカな連中を片付けるのは二人にとって簡単で、あれだけ威勢の良かった大の大人が、すでに十人以上が二人の餌食にかかり肉塊に姿を変えていた。バカと評価されたヤクザ、残り30ちょいは、ただ慌てふためいて銃の照準を定められずうろたえることしかできないでいる。

「人の幸せを横からかさうような輩は、サンタクロースとして・・・」

山吹の背中に自分の背中を預け、マガジンを再装填しながら緋村が、

「熱っつい鉛玉を・・・！」

刀を水平に構え、血に濡れた刃をギリギリと光らせながら山吹が、

「冷たい鉄刃を・・・！」

「プレゼントしてやるぜ！！！」

「プレゼントしてくれるる！！！」

ここで説明しよう。二人のサンタクロースが銃を握り、刃を振るって理由を。

「サンタクロースの仕事」とは、今さっき緋村が言ったように二通りの仕事が存在している。『良い子には幸せを、悪い子には不幸を』の通り、大昔から悪い子には石炭を配るという習慣があった。現代においても形を変え、その習慣は受け継がれ、

『人の幸せを奪う輩には、サンタクロースの名において天罰を』

という、サンタクロースにのみ許された罰の執行が許されている。

この場合にのみ限り、サンタクロースは国家権力に対して正当に「殺人」すらも許可されている。プレゼントの詰まった袋を捨て去り、武器を構え、悪に鉄槌を与えるという意味が、二人の着ているこの黒い衣装には込められている。余談だが、サンタクロース各々の使用している武器は自分の趣向に合わせ様々であり北アメリカサンタは大型スレッジハンマー、南アメリカサンタはチェーンソー、オーストラリアサンタはバズーカ、ヨーロッパサンタは弓矢、アフリカサンタは槍を使っている。

その中でも緋村と山吹のコンビネーションは修行時代の頃から群を抜いていた。ほとんど毎日の様に暴力的な喧嘩を繰り返してきただけのこともあり、互いの行動、思考を常に読み合う事で誰よりも最高に息の合ったコンビネーションを発揮されていた。

喧嘩するほど仲がいいとはよく言ったものだが、この二人の関係を例えるならルパン三世と銭型警部とほとんど同じ関係にあると言っても過言ではない。お互いはお互いが嫌いだが、いざ息を合わせるとどこの誰よりも最高のパートナーとなる、そういった意味だ。

(この場合ルパン→緋村、銭型→山吹)

「殺せ！！！」

工藤の合図と共に、混乱状態だった手下ヤクザ達が一斉に発砲した。

全方位から飛んで来る弾丸の嵐を二人は左右に跳んで退くと、「プレゼント」の配達に取り掛かった。

緋村は跳び交う弾丸の雨を掻い潜りながら間合いを計ると、床を強く蹴って倉庫の中を高く跳び上がった。人間離れした脚力に呆気にとられている馬鹿ヤクザに照準を合わせると、ニタリと笑いながらトリガーを引いた。空中で回転しながらも、発射された弾丸は正確に額と胸にトンネルを開通させてみせた。

着地したころにはもう足元は血の海に染まりつつあり、血の池地獄にも等しい惨状と化していた。床に足をつけば、ピチャリと血が跳ねてブーツが赤く染まった。

今度はそのまま間髪いれずに両手を万歳する様に高く掲げ、左右同時に射撃。数秒後、二階の踊り場から二人の男が血に染まりながら地獄の中に落下した。緋村からは見えない所で狙撃しようとしていたのであろうが、緋村にとって気配、取り立て殺気の察知は容易だあるのでどこに隠れようと無駄だ。皆一瞬で撃ち抜かれ、全て肉塊と化してしまう運命だ。

比べて山吹は、殺り方がとても豪快だった。弾雨の中へ真正面から突っ込むと、目の前に跳んできた弾丸を一発残らず切り捨てながら走っている。さながら獅子の如く雄叫びを上げつつ間合いを詰めると、慌てふためくヤクザ共を視認不能の超スピードで次々とブツ切りにしてしまった。ある者は胴を、ある者は頭を切断され、血液の噴火の様に血を撒き散らしながら倒れて逝った。

緋村がお構いなしに銃をブツ放していると、すぐにスライドがオープンして弾切れを知らせる。拳銃の中でも装弾数の多いベレッタだが、さすがにこの数が相手では弾がいくつあっても足りなくなってしまう。倉庫の荷物の陰に隠れながら空になったマガジンを放り捨て、予備のマガジンを急いでセットし直し、陰の外から飛んで来る弾丸が止むのをジッと伏せて待つことにした。

しかし次の瞬間、遠くから激しい金属音が耳に響いたかと思うと、すぐさま弾雨が止んでしまった。

そっと覗きこんでみれば、まず視界に飛び込んできたのは、血でべっとりと濡れて染まった刀を握っている山吹の姿だ

った。山吹はポケットから数枚の懐紙を取り出すと、血に濡れた刀を磨き始めた。

「・・・これだから銃と言うのは不便なんだ。弾切れが起こればそこに隙が生まれる」

「へ、刀だって刃が欠けたらお終いじゃねえかよ」

山吹はそんな緋村の意見を鼻で笑ってスルーすると、血まみれになった懐紙を放り捨てた。

二人はそれぞれ武器を納めると、改めて周りを見回した。辺りに転がっているのは、呻き声一つ上げることさえ許されなくなった死体の山だ。床と壁は血で染め上げられ、足元に転がるのは穴だらけの死体や切断された腕や首ばかり。壁にまで血は飛び散り、所々には人間の臓物までぶら下がっている。阿鼻叫喚、死屍累々、まさに地獄絵図のような有り様だった。半分は緋村の所業で、もう半分が山吹の功績である。

「よし、プレゼントの配達は終わったし、後始末して帰るか」

山吹は刀を鞘に納めると、背を向けてまっすぐに檻に閉じ込められた女の子の下へ急いだ。

しかし緋村だけは、まだチラチラと辺りを見回し、死体の数を数えながらヤクザ共の死に顔を拝んでいた。

さっきから数えてみても、死体の面を確認しても、どうしても足りないのだ。あの工藤の死体が・・・どこを探しても転がっていない。

無意識の内に撃ち殺したのかもしれないが、どうしても腑に落ちない・・・。

「山吹・・・オレちょっと探しものして来っからよう、その娘頼むわ。バイクにでも乗せといてくれ」

「・・・？ああ」

・
・
・

「ゼエ、ゼエ、ゼエ、・・・っクソ！何なんだあのクソガキどもは・・・！？」

一方の工藤は、あの殺戮地獄の中から運良く逃げ出すことに成功し、業者から取引する予定だった大金の詰まったトランクを抱えて走り、逃げようとしているところだった。しかしトランクが思いの外重く、抱えて走るというより引きずりながら歩いているという描写の方が正しい。

このままもう少し行けば、待機させていた車がある。それに乗りさえすれば自分だけは逃げ切ることができる。下の者達が大勢殺されてしまったが、オジキにこの金を渡しさえすれば、きっと咎められる様なことはないだろう。

とにかく、今は事務所に戻ることが優先だ。それ以外道は見えない。

それなのに、たった一つの銃声が、それすらも破壊してしまった。

背後の暗闇から弾丸が飛来し、工藤の右ひざを貫通した。予期せぬ攻撃に驚く暇もなく、工藤はつんのめって冷たいアスファルトの上うつ伏せに倒れた。激痛に表情を濁らせながら振り返ると、そこには冷たい冬の海風にコートをつたなびかせながら銃を構える男が立っていた。

男は一步步み寄るともう一発、銃を発砲し今度は工藤の左ひざをブチ抜いた。さらにもう一歩進めば肩を、次は肘を、そして両手までも撃ち抜きながら近づいてきた。

工藤は全身に染み渡る激痛に悶絶し、声を上げることすら忘れてしまっている。

「一人だけ金持ってトングラたあ、いい度胸してんじゃねえか・・・ええ？」

工藤の動きを完全に封じきると、眼前まで近づいて銃口を工藤の乱れたオールバック頭へあてがった。無骨なベレッタが、月の光を浴びてキラリと黒く輝いた。

「た、たた頼む！い、命だけは勘弁してくれ！！金なら、金なら幾らでも出してやるから！！」

緋村は工藤のあまりにもありきたりな命乞いを完全に聞き流しながら悟った。

こんなのに生きる資格なんざねえ・・・と。

「サンタは悪い子には一番望まない者を送る・・・。テメェはこのサンタの目の前で他人の幸せを奪い取った・・・」

徐々に引き金に入る力が強くなってきた。

「特別大サービスだ。残りの鉛玉全部くれてやるぜ・・・」

地獄で 詫びるんだな 「MerryChristmas」

ガン！！ガン！！ガン！！

ガン！！ガン！！ガン！！

ガン！！ガン！！ガン！！

ガン！！ガン！！ガン！！

夜が明けた12月25日。今日は待ちに待ったクリスマス当日だ。

そんな幸福の日の朝を飾る朝一番のニュースは、港の倉庫で発生した爆発事故の話題だった。

昨夜未明、〇〇港の13番貨物倉庫で、巨大な爆発事故が発生した。現場には複数の人間の死体も発見されていたが、死体の燃え方が激しく人物の特定はほぼ不可能になるまで燃え散っていた。

調べた結果によると、この日13番倉庫に保管されていた花火などの大量の火薬に何らかの理由で引火し、倉庫内で誤爆したとされている。

同時刻、空に数十発の花火が打ち上げられているのを目撃されており、捜査当局はクリスマスイベント直前の事故として捜査を打ち止められた。

全ては「ただの事故」。警察も、報道も、視聴者も、全員の総意でこの事件は消えた。

場所は移り、緋村が住んでいるボロアパートの一室。

今ここには、昨日借金の肩代わりという名目で愛娘を失ってしまったあの不憫な父親が住んでいる。一晩中泣きだけ泣き続け、後悔し、懺悔をし尽くしていたせいもあり、すっかり疲れやつれていた。目を赤く腫らし、頬もこけてしまっている。

目の前のテーブルに置かれているのは、一通の封筒と一本の包丁。封筒の中身は、朝までかけて書き上げた遺書だ。彼は今、自殺を図ろうとしている真っ只中なのだ。仕事も失い、妻にも逃げられ、唯一の財産だった娘までこの世から消えてしまった。

もう生きるだけの気力はこの男に存在していなかった。

うつろな瞳の先に移るのは、娘と撮ったお花見をした時の写真。この時の桜は見事な満開で、娘も楽しそうに花びらを一生懸命集めていたことを、走馬灯のように思い出す。

「千草・・・待っているよ。お父さん、すぐに行くからな・・・」

写真に向かい力なく微笑みながらつぶやくと、ついに包丁を右手が掴んだ。両手でしっかりと包丁を固定し、先端を自らの心臓の真上へ合わせた。

前に聞いた話なのだが、心臓を刺して自殺する場合、心臓の前の肋骨が刃が引っ掛かって確実に死ぬことができないらしい。それを防ぐためには、包丁を水平に構えて刺せば、一撃で確実に死ぬ事ができるそうだ。

そんな無駄知識に従い刃を水平に構え直し、そしてそのまま一気に・・・

「お父さーん、ただいまー！」

心臓へ一直線に走る包丁が、急停止した。

今一瞬、耳に娘の声が、千草の声が聞こえた様な気がしたような・・・。それも学校から帰って来た時の同じように、「ただいま」と。

半信半疑のまま、一応包丁は捨てて鍵のかかった玄関へ向ってみる。

「お父さーん、ただいまー！ 鍵開けてー！」

薄い板きれ同然の扉の向こうから、今一番聞きたかった娘の声が、はっきりと聞こえてくるのが解った。

すでに干からびていたと思っていた涙がこぼれてくるのを感じながら、急いで鍵を開場して扉を開いた。

そこには、昨日着ていた物と同じ服を着たまま玄関前で立っている、千草の姿があった。幻でもなんでも無い、本物の千草だ。

「ただいま、お父さん！」

千草は父親を下から見上げながら、屈託のない笑みを浮かべながら、もう一度ただいまと言った。

瞳の奥から、湧き上がる泉の様に涙があふれてきた。

父親はその場でしゃがみこむとギャンギャン泣きながら、自分の娘を力いっぱい抱きしめてあげた。

「千草ぁ・・・！よかった、無事で本当によかった！！ごめんな、お父さんのせいで、怖い目に合わせてしまって・・・グス、グス」

「お父さん泣かないでよ、それよりアタシお腹すいた。ごはん食べよ！」

「・・・そうだったな、もう朝だしな。よし、ごはん作って食べようか！」

「うん！！」

涙と絶望しかなかった父親に、何時間かぶりの笑顔が戻った。

お金は無いかもしれない、裕福な暮らしとは言えないかもしれない。

でも、二人のにとっての幸せは、確かにここにあった。

その後、娘のポケットから取り出し、渡された封筒の中身を見て驚かされた。封筒には、手にしたことのない量の福沢諭吉の大軍団が詰め込まれていたのだ。こんな大金をどうしたのか、そもそもどうやって家に帰って来たのか、とても気になって食事しながら聞いてみたのだが、千草の口から出てきた答えはただの一点張りだった。

「サンタさんが来てくれた！！」

仕事を終え、アフターサービスも終了した二人は、現在バイクに跨って朝日に照らされる東京上空を低速で走行していた。

仕事とは、13番倉庫の爆破による証拠隠滅と報道機関への根回し。アフターサービスとは、持っていかれた娘さんを無事家に送り届けて事件当時の記憶を部分的に完全消去すること。ついでに緋村が持ち帰った札束のプレゼント。

それぞれ幸福と不幸のプレゼントを配達し終え、二人ともクタクタだった。

山吹はサイドカーから足を放りだした姿勢で、頭上の緋村を覗いている。

「どうだ？見返りは無くとも、人に幸せを送るのも悪くなかったろ」

「な～にが……。不幸を送ってた時の方がよっぽど楽しかったわい」

緋村はどうやらまだサンタクロースの仕事についてツッパリ気味のようだ。この分ではおそらく、またサンタなんかやりたくないと言うかもしれない。ここまで言ってここまでしてもだめなようなら……。もはや仕方がない、会長には自分から頭を下げるしか無さそうだ。

思わずため息が出てしまった。

「……山吹よう」

「ん？」

「ジジィに言っとけや。『今年は断る、けど来年はまた声かけろ』ってな」

緋村の口から、予想すらできなかった言葉が飛んできた。

その言葉の意味するところでは、どうもサンタの仕事にやる気を出してくれたのかもしれない。

最初は驚きで表情が固まってしまったが、すぐに冷静さを取り戻して表情がかすかにほころんだ。

「……………わかった。伝えておこう」

「おう……」

20XY年12月24日、クリスマスイブ当日。東京。

この日の天気は全国的に雪。俗に言う「ホワイト・クリスマス」ってやつだった。

夜も更けた空に、今宵もサンタクロースがバイクに跨って夜空をツーリングしていた。

赤いサンタクロースの服を身に纏い大型バイクを運転しているのは、東アジア担当新サンタクロース、緋村剣助だった。

バイクのタンデムシートには、巨大な白い布袋と、何やら見たことの無い怪しげな機械が乗っかっていた。機械と袋は、なぜか数本の電極コードとパイプで繋がれている。

「サンタの仕事は今年から引き受けっけどう……なんでテメエまで付いてくんだよ
コラァ！！？」

緋村がそう叫びたくなるのも無理はなかった。本来サンタクロースは、1地区に対して一人が担当するものなのだが、バイクのサイドカーにはなぜかよく見慣れているいけすかない眼鏡男、山吹望が居座っていた。

「気にするな。ボクは会長からのお達しで、仕事を手伝いながらお前が仕事をサボらないか監視する様に言われただけだ」

「あんの糞ジジィ……（怒り）。だいたいテメエは西アジア担当のサンタじゃねえのか！？そっちはどうなってんだよ！？」

「それはお前、別のサンタが新たに担当してくれることになった」

「オイオイヨ～……勘弁してくれよお……」

自分の中の常識では考えられなかった事態に、緋村はガクンとテンションが下がってしまった。

「まァ、仕事効率は2倍になったんがから、お前がいい加減なことをしなければ特に問題ないだろう」

ま、実際はそうなのかもしれないが……。

頭を抱えて考えぬいた揚句、緋村はなんだか無性に叫びたくなった。

「だああああ、畜生おおお！！あのジジィ今度会ったらブン殴ってやるううう！！こうなったらさっさと終わらせて帰るぞお！！」

「無論だ、騒ぐなアホ。……そんじゃいくとするか」

山吹はサイドカーのダッシュボードの中に手を突っ込んでゴソゴソとまさぐると、何かを取り出した。

出てきたのは、一本の金色のハンドベルだった。

「よし、そんじゃいくぞお！」

「おう、ちゃっちゃと終わらせるぞ！」

合図を送ると山吹はサイドカーの上へ立ち上がると、ハンドベルを高く掲げて耐えに大きく振り、ベルを鳴らした。

カラァン！　カラァン！　カラァン！　カラァン！

バイクの爆音を浄化するかのような涼しい音色の波紋が、雪の降る東京中に響き渡った。

東京だけではない。音の波紋はハンドベルを中心に、空へ、大地へ、そしてもっと遠くのどこかへ鳴り渡って行った。するとどうだろうか。

地上を移動する人々が、空を飛ぶ鳥が、全ての動物が、走る車や電車までもが、徐々にその動きがスローモーションになってしまう。

やがて数秒もすれば、全ての動きが完全に停止してしまった。空を舞う雪さえもが、落下することをやめて空中に停止してしまっている。

これがあのハンドベルの能力、ザ・ワールド……。

じゃなくて、「セイントベル」。このハンドベルを鳴らすことにより世界中の、いや、この地球に、そして宇宙にまで流れている全ての時間を「停止」させることができる。

サンタクロースがたった一晩で世界中の子供たちにプレゼントを配ることのできるカラクリ、その正体がまさにこれなのだ。

今この瞬間、この世で動いているのは緋村と山吹、そして二人の乗っているバイク以外存在していない。

「・・・止まったか？」

「ああ、完璧にな」

「よっしゃ、さっさと始めるか」

「あいよっと」

山吹はベルをしまうと、今度は背中から巨大な鉄筒を持ち上げて肩に担ぎあげた。

この鉄筒は、見てわかる通りバズーカってやつだ。そのバズーカの後部は、山吹の背負っているランドセルくらいのバックパックに繋がっており、バックパックはタンデムシートに陣取る機械に連結し、さらに布袋にも繋がれていた。

この機械の説明をすると、この袋の中には子供達の願うプレゼントのデータが詰まっており、それを機械が読み取り具現化、連結したバズーカで撃ち出すというシステムになっている。

「よおし、いくぞ、発射！」

バゴオオオオン！！

トリガーを引いた途端、バズーカから大きな光球が空へ向かって発射された。光球は一定の高さまで打ち上げられると、空中でまるで花火の様に光が爆発し、あちこちへ四散した。

この四散された小さな光こそが、プレゼントなのだ。光はやがて風に乗ってプレゼントを求める子供たちの元へ飛んでゆくのだ。

もちろんプレゼントはこの一撃だけではない。山吹は四方八方へ絶え間なくバズーカを打ち続け、夜空に煌びやかな花火が咲くのだった。

こんな作業を、今晚は一晩中続ける、という訳だ。しかし時間が止まっているのだから、『一晩中』という表現は本当ところ間違っているのかもしれないが・・・。

しかし残念なのは時間が止まったことで本物のサンタクロースがプレゼントを配達している姿を見ることのできない一般人達だ。夜空には月なんかよりも明るく、そんじょそらの花火なんかよりずっと派手で美しい配達風景を見ることができないのだから。

暗い日本の夜空が、光に満ち溢れて、空全体が星の様に輝くのだった。

どうか残り少ない今年も、そして次の年も、幸せでありますように。

Merry Christmas!!

完